

昆虫館思い出ぽろぽろ、されど前を向いてー

竹田 真木生¹⁾

その前夜ー私が佐用に居を構えたのは、たまたま北区の自宅に新聞広告が入り、田舎の物件をいくつか紹介していたのを目にしたのがきっかけだった。子供たちも少しずつ大きくなって、一緒に田舎で生活するのも悪くなかろうと思った。また、大学では、実際、自分の講義で、農業生態系を絨毯爆撃する化学防除一辺倒の害虫管理を批判しているが、果たして化学防除なしで食料生産はできるのかという点については自分の経験はまるでなく確信がもてなかった。自分で確かめるほかないだろうと思って、いきなり始め、初めのうちは、クワやスコップというような簡単な農具で畝を耕し、やがて中古の耕運機などを買って、大根ばかりをやたら収穫したり、結実しないガタイの大きな黒豆を育てたりしながら、底の抜けた住まいの床を少しずつ整えて、静かな夜空にもものすごい数のカエルの鳴き声を聴きながら、子供たちと楽しい夏の夜を過ごした。家の前の溝などにピンクでマークされたタガメがたくさん浮いていた（愛媛大の日鷹さんらが調査に入っていたのだ）。そのような頃に、郵便箱に、知らせが入り、県立の昆虫館が間もなく廃止されるというニュースを伝えた。

私は子供のころ、三重県立博物館の正面から歩いて10分くらいのところに住んでいた。途中で護国神社があって、地蜘蛛を捕まえて遊んだりしたが、博物館の裏一帯は、藤堂藩の殿様の物見遊山に使った築山と、人造の森であった。桜、椿や、つつじが沢山植えられていた。池が2面掘られ、カワセミもいた。池からの水路が暗渠になっていて、そこに入ると足によく蛭が吸い付いてきた。偕楽園と呼ばれるその構築は起伏もあってそれなりに子供の遊び場としては面白いところだった。梅林もあった。ドングリの木もいっぱいあったし、大きな椎の木も生えていた。博物館は裏庭のようにして駆け回り、捨てられた沖積層の岩屑の中から貝殻などの化石を拾って喜んでた。私は、所謂、町家で育ったが、子供に関する限りは、隣の家などは境界がなく、人の家にも自由に入り込んで走り回っていた。豆腐屋や鍛冶屋は、興味のある空間で面白かったが、危ないからよそへ行けとはだれも言わなかった。印刷工場というのも面白かつ

た。近所の炭屋さんのおじさんにキノコや鰻とりなどを教わったり、博物館も執務室に入り込んで学芸員の富田靖男さんに虫の名前を教わったりした。ラジオ体操に朝早く行く、近くの広場の通りすがりの街灯の下に、タガメ、ゲンゴロウ、ガムシ、ヤママユにオオミズアオ、カブトムシやクワガタ、ヒゲコガネ、時にはカタビロオサムシを見つけて喜んでた。夕方、薄暮の池の周りにカトリヤンマがものすごい密度で飛んで、蚊をとらえていた。大人と子供の境界、公と私の境界、自然と生活の境界は今よりずっとあいまいで、子供は今よりずっと自由で、ずっと危ないことをやっていた。河合雅雄先生の「少年動物誌」の世界がこれを見事に描いている。さて、そんなことで、博物館は極めて大事な施設であるということ私は自分自身のことでも身をもって知っていた。何とかして昆虫館存続のための運動を起こしたいと思った。

そこで2人の人に連絡を取った。一人は、人と自然の博物館の八木剛さん、もう一人は神戸大学農学部昆虫科学研究室同窓会長の足立隆昭さんである。足立さんは、状況をすぐに理解してくれ、同窓会は全力で支援しますと約束してくれた。直ちに県に要請に行った。廃館は、県のレベルでは決定済みの方針である。事態は急を要する。足立さんと2人で、教育委員会の課長に会い、館の継続を要請した。ご意見は確かにお聞きします、と課長は確かに答えたが、次回、面会に行ったときには人事異動で、新課長がそこに座っていた。県としての撤回の意思はないということだ。八木さんは、もう一つの可能性としてNPOを設立し、施設を佐用町に移譲し、NPOが実際の運営を行っていくというプランについて述べた。そこで、佐用町との交渉が始まる。私が神戸大学時代JICAの委託事業で外国研修生を佐用町に案内してきたときに、役場の方で対応され、しかも私と住居が近い小林裕和課長に、庵途町長につないでもらい、私と足立さんが、町長にNPOによる運営を基本とした町立昆虫館についての提案書を提出し、基本的合意を得（2007年12月）、翌2008年3月7日に県立の千種川グリーンライン昆虫館は37年間の歴史に終止符を打った。

¹⁾ Makio TAKEDA 神戸大学農学研究科名誉教授

さて、このプランで県の立場としては、廃館に伴う後処理の費用も節約できるし、余計な負担はむしろ減る方だった。しかし、佐用町昆虫館はそれで自動的にできたわけではない、大きな山として、議会の承認以外に、NPOの結成と、瑠璃寺との交渉が残っていた。昆虫館は瑠璃寺の地所に建っている。瑠璃寺が認めてくれなければ動かない。これに先立ち、NPOの結成が企られた。八木さんの人脈リストから、これまで西播磨地域で、博物館の保存活動だけでなく、昆虫の多様性保護（近藤さん、相坂さん、三木さん、久保さんなど）と、特に子供への教育活動を担って来た方々（横山先生、野村先生）が集結した。それから、私の方の人脈の主にアカデミシャンたち。まさに、梁山泊の趣を呈した。何がうまくいったとって、この段階の人材の結集が、このNPOの最も優れたところであろう。第一回の集まりは5月に神戸大学で持たれ、多くの人が集まった。なんとなく私の思い付きの、名前も、提案した通りすつと決まり、「こどもとむしの会」とした。事務局は神戸大学農学部内とし、当時の学部長であった中村千春さんも、大学がそうして地域交流にかかわっていく姿勢を応援してくれた。定款等NPO手続きは八木さんの経験的ストックが役に立った。

昆虫館は、一時山崎高校の実験室として使われた後、当地に県立の上記の施設として、1974年に設立された。当時日本は高度経済成長の後、公害の発生とそれによる健康被害で、水俣病やイタイイタイ病、四日市ぜんそくという世界的にも有名な三大公害裁判の時代にあった。兵庫県としても、エコ教育は施政の重要な柱となっていた。後で群馬県立「ぐんま昆虫の森」前園長の矢島稔さんから聞いた話であるが、矢島さん達の作った豊島園の昆虫館を、兵庫県の職員が見学に来て、そっくりそのままのコピーをあそこに作り（「僕はびっくり仰天しました」といういきさつで）、そこに当時、指導主事をされていた内海功一先生を館長に迎えて、西日本初の生体展示をする昆虫館として出発したが、三田に県立人と自然の博物館が設立されるに及んで、整理統合、「館も館長も老齢のため」（県の言い分）最後のステージを迎えようとしていた。

内海先生は、元来は植物学の方に自身の興味を育てながら、地元の昆虫は生きた状態で子供たちに展示されるべきという信念で、地道な活動を続けられ、30年以上も生体展示を欠かさずにこられた（『キベリタテハ』2008、32巻1号：1-2. に書いたので詳しくは書かない）。こうしてトボスは築かれた。

建っている建物を廃するとなると、工事代がかかる。佐用町への移管については県には文句はなかろう。瑠璃寺の方にはプランがあるかもしれない。そうすると、この話は崩れる。三河町で瑠璃寺住職との交渉が行われた。「そうは言うが、もし、この話がうまくいかず撤退とい

うことになった時には、工事費は負担するのか」と鋭い切込みがあった。予め、こちら側では同意を得ておらず、もし内部で拒否されたときは自腹でやることになるという危険な展開を感じながら、「その時は、その費用を引き受けます」と啖呵を切った。大江管長の大慈悲にもすくわれたのだ。

こうして、嘘のような奇跡に支えられて新昆虫館が出発することになったのである。ミネルバのフクロウは飛んだ。

洪水はわが魂におよび—2008年11月30日に昆虫館の改修のために、下の山門前のスペースで、頑張れ昆虫館セールと銘打って、旧昆虫館の、取り壊されることになった温室内の植物や、NPO会員の持ち寄った標本や工芸品などを売り出した。内海先生はアナナスで、バツが飼育できるということを見つけれられ、ツマベニアナナスが沢山あったが、これや、九頭竜のような巨大なモンスターのグラフトを鉢どりし、これらを売り払った。近藤さんのお嬢さんの率いる3人の琉球三線娘のパフォーマンスも繰り広げられ、館は改修工事と1年間の準備期間に入った。町の方では法的な整備と施策上の準備が行われ、昆虫館条例（10月1日発効）、翌2009年4月3日の開園の運びとなった。「昆虫館の歌」も、凍結マンモスなどを出土するロシアのサハ共和国のオペラハウス総監督^註山本郁夫さんが作曲して整え、喜びの中で出航したしたが、その年の8月3つの台風が同じルートで佐用町を通過して、特に三つ目の台風21号の爪痕は大きく、佐用水域に堤防決壊、氾濫、商業地域や住宅にも、濁流の大きな爪痕を残していった。家が流れ、山には土砂崩れや、なぎ倒された木々の醜い傷跡をたくさん残していった。幕山小学校の児童がその濁流にのまれた。昆虫館も濁流に洗われた。

被害の翌日、とりあえず飲料水とと思い、内海先生、瑠璃寺、と市内の被害のあった知り合いに飲料水と、内海先生のところには、渡辺康子さんなども寄付して下さったが、大学で集めた見舞金を届けた。館内には礫というよりは岩のカテゴリーに入るようなものが扉をぶち抜いている。私はコンボを要請したが、三木さんが、近所の被害を放置したまま館だけにコンボを入れるのは配慮を欠く、とそれにストップをかけた。議論をしている時間はない。私はそれで、いくつかの川が合流してくる久崎地域に、対策本部（機敏で、非常によく統制の採れた指揮を行っていた。神戸の経験が生かされていたのだろう）からの指示に従って、研究室の学生（長場君）や家族と一緒にいった。佐用の地盤はペルム紀の形成による硬い岩盤でできている。地面に水はなかなか入っていない、水は河川を滑走して下る。そういう場合、3川合流、それ以上に4川合流の結節点にあたる久崎地域

の衝撃は当然大きくなる。家がいくつも流れている。流れず踏ん張ったところでも概ね1階の最上部まで泥の跡がついている。畳の上にびっしり泥のついたその堆積を、ブレードの頭が四角いショベルで切り上げ、一輪車に載せて運び出すのはものすごい重労働である。くたくたになって泥洗いにいった久崎小学校で、幕山小学校に勤め、子供たちを失い、復旧と捜索に加わった上野先生と出会った。上野先生は、ちょうど神戸の震災の時に、私も研究室の、消息が知れなかった学生を捜していた、すっかり火によって焼き尽くされた、大学下の、六甲町という、学生がたくさん住んでいた地域で娘さんを失った方だ。長場君の知り合いでもあった。まだ警察もそのあたりの水路を子供たちの捜索のために棒で突いているような状況であった。昆虫館の方の復旧は三木さんが記録しているので、そちらを参照されたい。結局コンボが入り、若いお坊さんたちの奮闘も得て、復旧されたが、もうその年の運営は不可能となり、再び休館に入る。

翌年4月、再び昆虫館は動きだした。奇跡の復活を遂げ、様々な英雄伝説を生み、スーパースター大江少年や松平少年を生み出した。それから清水さんや斎藤さんなど、今ではなくてはならないスタッフも集まった。

こうして、順調な再出航を果たしたかに見えた昆虫館であったが、2年過ぎた冬を越して、3年目の開館準備をしているさなかの3月11日、再び東北地方を地震が襲い、津波をよこして2万人以上の人々が海にさらわれてしまった。おまけに今度は、福島第一原発が崩壊し、おびただしい放射能が地域、それもかなり広域にまき散らされてしまった。佐用町も職員を派遣し、人と自然の博物館も博物館ネットワークを通じて現場に駆け付けた。三木さんも、いつもの出足で数回走った。私は、洪水によって地域の図書館の被害があったろう、本の供給を行いたいと考え大学周辺で本を集め、近くで古本のセールで留学生を奨学金支援している神戸学生青年センターの飛田さんに、余った子供向けの本を寄付してもらおうよう頼み快諾を得、大学の若手教員のボランティアにも手伝ってもらって1000冊以上の本を調達した。これを私が、トラックで運びたいと提案したところ、理事会で否決されてどうしようかと考えてきたところに、救いの「船」が来た。神戸大学というところは海事科学部というのを持っている。昔の神戸商船大学だ。これが練習船を持っていて、それを使った復旧事業を公募したのだ。そこで、神戸大学、NPO こどもとむしの会の共同事業計画を書いて採択された。集められた本は、練習船「深江丸」で塩釜に運ばれ、塩釜教育委員会に寄贈された。塩釜港に停泊中の船内で「移動昆虫館」をやり、塩釜中学と幼稚園にもでかけ、標本展示と講演をおこなった。それから女川町の避難所で足湯などのボランティア活動を行い、その合間に、小さいが東松山町の野蒜地域とい

う最も激甚な被害を被った地域、清水さんもご存じの広範な地域を含む閑上(ゆりあげ)地域を訪問した。何れも、もう、言葉にならないありさまで、胸がつぶれた。野蒜地域では金属製の街灯が「の」の字になって倒れている。これが津波の力だ。移動昆虫館に船を訪れた年配の方(広島被災者であった)から、津波と原爆は同じ形で家を破壊すると聞いた。すべての力が横殴りであるのだ。上から押しつぶす東灘区のような様相とは違う。津波の方は遅いが、少しずつ復興の兆しが見えるが、福一の方は、兆しが見えるのにも程遠い。人々はオリンピックに浮かれているが。三木さんは、その後も被災した子供たちを播磨地方に招待したり、持続的な活動を続けられた。私の方では二の矢を継いでいないのが心苦しい。

三木進さんが、昆虫館10周年を待たず、異界に旅立たれた。下垂体除去という手術で、生存の可能性すら疑われる状態で、NPO創設の時から昆虫館の維持・運営に心を砕かれた。本来なら正式の弔いの言葉を会として記するのが礼儀であろう。できれば、私がまとめようかと考え、ご子息にコンタクトもとったが、三木さんも家庭的にいろいろあった様子で、細かなことは伺えず、伺うこと自体が失礼にもなると自重した面もある。三木さんの標本の処置について最近昆虫学会から引き取り手を探す広告が流されていたが、きちんと処置してあげられなかった悔やみが残る。先に逝かれた幸子さんも館においての時には特製コーヒーなどを参加者にふるまわれ、下垂体除去による甲状腺障害からの情動の上下する進さんを、最後まで支えてこられた。会として、お二人に心からお悔やみの言葉を申し上げる。生前にもう少し確かなコミュニケーションをしておけばよかったと残念であるが、こんなに早く逝ってしまわれるとは予想もできなかった。三木さんには、神戸新聞筋で2015年の井植文化賞の地域貢献部門でのNPOの受賞に途をひらかれ、副賞100万円が佐用町に寄付された。

十年、そしてこれからの展望—昆虫館は、再出発ののち年間入場者4000人以上を確保し、初めの活動のレベルを維持している。のべ4万人以上が訪問したのだ。伝統も涵養され、これが新しい芽を育てている。これからの発展を考慮し、今少し振り返って、このNPOの組織としての可能性と問題を見ておくのも悪くはなからう。いやそうしないと、すべてのものは憔悴していくのが常である。

昆虫館の成功は、素晴らしいNPOが形成されたということが原因のかなり大きな部分であると思う。そして、このNPOはユニークであった。この昆虫館は、大きなスポンサーや自治体丸抱えの、雇用された職員による運営ではなく、様々な異なる領域の専門家の広い裾野を持っていた。特に、子供たちと、子供たちの情操教育を

育てようとしてきた人びと、博物館関係者、教員、大学における研究者、ビジネス関係者、学生、趣味の昆虫愛好者などが、そこそこの、かつ微妙な比率で混じりあっていた。彼らは、異なった理想とビジョンすら持っていたが、逆に、これこそが活力である。このような不統一は、あるビジネスモデルにおいては否定的な側面となる。しかし、このNPOの場合はそれが生産的に働いた。

社会的な組織には、いろいろのものがある。人類は、本当にうまく働く組織というものをなかなか探り出せていない。組織は形成したとたん、矛盾を生み出し、新しい社会は紡ぎだせるはずの道を失い、脱線してしまうことが多い。これまで、うまくことが運んできたのには、「昆虫館を守る」という、それこそ禅の言葉でいう「公案」が正しくなされたからであろう。これからも正しい公案が、議論され、維持されて行かないと、やがて、最初にかけ参じた人々が、老化により、あるいは死亡してしまうケースもあり、様々な理由で離脱する状況が生まれるかもしれない。この様な状況を私は心配する。個々のメンバーが異なるビジョンを持つ限り、考え方の齟齬が生まれる。しかし、この問題については、それに過度に干渉しないことがうまい解決であろう。メンバーを信頼するということだ。これまでの、活動については、ほぼそれぞれのものが、メンバー個人のイニシアティブによって担われてきた。実際、いろいろなことが行われ、館の運営以外に、移動昆虫館、「虫のお話、5つ星レストラン」、地震の慰問、ひまわり祭りへの参加、電子顕微鏡の紹介、博物館協会への参加、委託業務等々。若干の費用は派生するかもしれないが、それは融通しあいながら解決されてきた。最近、5つ星の議論の中で、提案について数人の理事から veto が提出され、この活動が難破してしまった。本件については採決もなされていないし、十分な議論もなされていない。この展開を私は憂慮している。一緒に、NPOの活動をやっていくためにはメンバーの間の共感が必要である。無言の信頼がある。

初めに長々述べたのは理由がある。私は博物館に受容され、育てられた。同じ関係性は、高校に入ってからでも持続された。三重大学農学部には昆虫研に山下善平教授がいて、私たちが、思いついたときにアポなしで尋ねていくことを許してくれた。博物館の前館長もやった、三輪勇四郎先生は、北大を出て、甲虫の神様と呼ばれていて、台中にある台湾の農事試験場の父のような人だった。この先生が、私の小学生時代に、台湾の蝶を2箱私にプレゼントしてくれた。切手の収集家でもあったから、アメリカの歴代大統領を全部並べた切手を私にくれたりして、とてもかわいがってくれた。勿論、採集会などに連れて行ってもらうからではあるが。ともかく、専門家と子供が同じ時空で虫のすばらしさを共有する空間はいくらでもできる。そのことがいかに大事な経験で

あるか、私にはわかる。そういう窓を開け続けておくということが大事だというのが私の主張だ。蚊帳の中に蝶を入れて放し、それをつかむタテボシ（殿様が海岸に網を張って、そこにあらかじめとった魚を放しておき、それを手づかみで採る遊び）のようなことが子供を興奮させるかもしれない可能性を私は排除するわけではないし、移動昆虫館にしても私は称賛した記憶こそあれ、やめにせよなどとは言った記憶がない。そのようなことは、やっている人々に失礼に当たるからだ。同じ理由で、提案し、実績もある5つ星に反対するということは、よほど理路整然とした理屈がある。現実には、「反対である。しかし、理由は延べない」。これでは、NPOは存続できない。

佐用町にはタガメがそこそこの個体群密度を保ちながら生息している。おそらく、日本における最後のサンクチュアリとなるだろう。この虫だけでなく同じニッチェに棲むゲンゴロウ等の水生昆虫の命運も同じ道をたどるのである。今年は、タガメの姿を見かけていない。最後の時は早晚やってくるだろう。タガメの生存を脅かすものは何か？ 私たちは、内分泌攪乱物質が、タガメの生殖を乱している証拠を得た (Nagaba, Y., M. Tufail, H. Inui, M. Takeda (2010) Hormonal regulation and effects of fur environmental pollutants on vitellogenin gene transcription in the giant water bug, *Lethocerus deyrollei* (Hemiptera; Belostomatidae). *Journal of Insect Conservation*, **15**: 421–431.)。それだけではない。福一の事故は、農業活動と里山の維持が重要だということを教えている。佐用町は人口の陰圧が増加しつつある。里山を守る、しかもタガメを守るためにそれが重要だということをどうやって理解してもらえるか。説教や理屈だけでは説得力がない。そこで、里山で、老人力でもできる、ローテク、グリーン産業はないか考えた。トンボの東さんの助言もあり廃園になった石井保育園跡の再開発に応募した。コオロギ・ファームを当面の柱にする。こうして、プロジェクトが出発した。宿泊施設が隣にあるので、新産業の展開と教育活動を結び付けて。これを昆虫館の姉妹施設として発展させるつもりだ。ファームとしては最適な場所ではないことは承知している。冬季の低温はかなり激しい。しかし、モチベーションとして、里山保全とタガメを守るということが前提条件にあるから、撤退することはできない。将来的には、オオサンショウウオも含めた淡水動物園に発展させる夢を私は持っている。テネシー州の東南隅にチャタヌーガという町がある。南北戦争の激戦地でもあるが、そこに素晴らしい淡水博物館がある。それを地域の再開発の拠点にして成功した。埼玉の羽生市にも淡水水族館があり、タガメが飼われている。埼玉は表面水域が日本で最大だというのは最近、私が園長をやっている幼稚園の園児を連れていくまで知らなかった。私たちの館でも生体展示のスーパースターは、ドンコ、

オヤニラミ、イモリ、モリアオガエルなど多数いる。石井地区にはイモリは狭い地域で数百固まっているし、オオサンショウウオもかなりいる。これらを、タガメ、ゲンゴロウ、ナベブタムシと、つないでいくと面白いものができるはずだ。「きれいな水系、自然、ムシ」は佐用町が守り育てる大事な資源である。「水害のせいで」という題目はあるが、いまだに護岸工事というものが続けられている。かけがえのないものが失われしまわれぬうちに、きちんとした検討が必要だと考える。淡水水族館の建設などあまりに途方もない計画に聞こえる。このような「たわごと」は取り上げないという向きもあろう。でも、ここまで夢を見ながら進んできたのだ。夢を育てる方に賭ける人たちを私は、尊敬する。ここまでこられたのもその力が大きかったのだもの。地域おこしのモデルとして、豊岡には「こうのとり保護」から演劇に特化した大学までできる。平田オリザ学長予定者も家族でのりこんでくる。佐用と豊岡はそう遠い距離ではない。「丹波の森公苑」のオオムラサキから上郡の「赤松の郷・昆虫文化館」まで北兵庫に自然と文化を結ぶ夢のアーチがかかればよい。他ならぬこの過疎の地に。

昆虫館のこれからの発展を心から祈る。いろいろな人々が、それぞれに夢をもって、この仕事にかかわり、伝統を作り、さらに想像もできない方向と規模に発展し続けていてもらいたいと思う。私たちの作りたい夢は、自分たちで掲げ、その実現に努力すればかなえられる。それをこの10年の努力は明確に示した。陰に陽に、力を惜しまず努力された方々に、感謝します。若い力が澎湃として加わり、これまでの努力を継承、発展していつてもらうことを希望します。